
Silvery landscape

冬里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silverylandscape

【Nコード】

N1617L

【作者名】

冬里

【あらすじ】

銀世界――

約百年前……王属特務零番隊長及び、王属特務89人が殺害されるという前代未聞の反逆がおきた。
容疑者と思われる、王属特務零番隊副隊長の行方は不明。

現在も、行方を追っている。

事件未解決の霊界とは裏腹に、尸魂界では別の事件が始まるうとしていた。

そして、護廷十三隊十番隊隊長が動き出す――

日番谷中心の物語……一護×日番谷な要素ありです

初幕

はらりはらりと雪が舞う。

白い息が絶え間なく零れる冬の外、雪が隠すかのように一人の男を埋めていく。

男に息は無く、徐々に体温を奪い取っていく。

ポタリポタリと血が雪を染める。

血は、立ちすくんでいる男の刀から伝い落ちていた。

幾多の血を浴びた男の身体は赤く染まり、存在を更に引き立たせる。

瞳には何も映っていないく、濁り切って光は消えていた。

まるで、感情のない人形のような。

大分そうしていると、複数の足音が聞こえてくる。

男は一度迷ったが、決意を固めた。

そして、後ろにある扉へ身体を向けると、刀を向け唱える。

すると、凄い音と突風を巻き起こし、扉は開かれた。

男は強く一歩一歩を強く踏み出す。

後ろをもつ振り向くことは無い。

扉は静かに閉じられた――

一幕

—— 百年後

変わることのない銀世界に、再び雪が降り上げたのかもしれない。

——中央四十六室

尸魂界の最高司法機関と言われる場所で、三人の影が映る。

「私が天に立つ時が来た」

三人の中で最も威圧感が強い人物が、薄気味悪く微笑む。

「行くぞ」

彼の言葉に二人は返事をする、中央四十六室から姿を消した。

「——やはりな」

既に誰もいるはずの無い中央四十六室に、一つの声が響く。

「あいつが黒幕だったか」

足音が聞こえたと同時に、清浄塔巨林へと姿を見せる。

「全員死んじまったな」

辺りに漂う異様な臭い……目の前に広がるのは、血に染まりあげて
いる無数の死体だった。

ただ黙って見てると、もう一つの足音が聞こえてくる。

「別によからう。こやつらは今まで王族からの命令だと言い、何百人もの罪無き者を殺して来たのだ」

「自業自得ってやつだな」

愚かで汚い物を見るかのような瞳を向け、呆れるように笑っている少年の隣に、男が歩み寄り立つ。

用事を達した二人は、中央四十六室から外へ出る。

離れにあるせいか、周りは驚くほど静かで穏やかだった。

「これからどうするつもりだ？」

「そうだな……取り合えず、何時も通り普通にしてるさ。まだ時は満ちてない」

「まだ？これから何かあると確信してるのか？」

「確信ほどではないが予感はある。そう遠くもない内にな」

「お前がそう思うのであればそうなんだろう。それにしても」

——天に立つなど、愚かだな

少年は黙っていたが、ふつと皮肉に笑みを零した。

そして、ゆっくりと歩き出す。

少年の背中に刻まれたく＋は月光に照らされていた

二幕

——月が出始めてきた午後

人気の無い道を、一人の少年が歩く。

辿り付いたのは、？志波空鶴？と書かれたアヴァンギャルドな屋敷。

「相変わらずセンスにかけてるな……」

呆れたように溜息を付くと、二つの霊圧を頼りに再び歩き出す。

屋敷の裏まで行くと、目当てだった人物と一匹の姿が見える。

どうやら、お互い酒を飲んでいるみたいだ。

後ろに立つが相手は気付かない為、こっちから声をかけた。

「夜一、空鶴」

「「うおお!?!」」

夜一と呼ばれた猫・四楓院夜一と、空鶴と呼ばれた女・志波空鶴は、驚きながら後ろを向く。

その存在を見た一匹と一人は、更に目を見開きながら驚く。

「なっ」

「てめえは……」

「「冬獅郎!?!」」

冬獅郎と呼ばれた少年・日番谷冬獅郎はふつと笑みを浮かべた。

「久しぶりだな、冬獅郎」

「ああ。お前等とはもう八年ぐらい会ってないからな」

空鶴は、その通りだ、と言わんばかりに首をうんうんと振る。

「隊長として馴れたか？」

「大分な。お前はどうかんだ？」

「わしは猫生活に満足中だ。喜助も相変わらずエンジョイ中じゃ」

楽しそうに話す夜一に、日番谷は「そうか」と笑みを零す。

漂う和やかな雰囲気……だが、一瞬で真剣な物へと変わった。

「で、俺達に聞きたいことがあって此処に来たんだろ」

「用件は……旅禍についてじゃろ」

二人の問いに、日番谷は「ああ」と返事をする。

「市丸が旅禍を取り逃がしたって聞いてな。どうせ、その旅禍って言うのは夜一達のことだろ？」

「いかにも。そこまでもう情報は漏れているのか？」

「いや。知っているのは俺と……藍染含む三人ぐらいだろ」

「何だと!？」

驚きで声を上げる空鶴とは違い、夜一は「やはりな……」と冷静に呟く。

「朽木ルキアの処刑……ということは、もうバレているのじゃな」

「朽木ルキアの身体に埋め込まれている物……それは崩玉だってな」

夜一は何とも言えない複雑な表情をする。

「朽木ルキアの処刑に燬？王でも使って、崩玉を取り出すって言う

魂胆だろう」

「そうさせない為には、わしらが処刑を止めるしかない……そういうことか？」

「その通りだ」

そう頷くと、日番谷は懷から何かを取り出し、夜一に渡す。

「これは……」

「尸魂界の地図だ。少しでも役に経つだろう」

「うむ、正直助かる。百年も経つとすっかり忘れていたからな」

夜一が受け取ったのを確認すると、ふうーと用を足して一息つく。

「じゃあ、俺は瀨靈廷に戻る」

「もう行くのか？せめて酒ぐらいは飲んでけよ」

「いや、夜にでもなったら隊首会でも開かれるだろうから無理だ。」

それにお前等だつて、これから忙しいじゃねえか？朝方にでも花鶴大砲で打ち上げるんだろ」

「あー、そう言われてみればそうだな」

「まあ、頑張れよ。俺も陰ながら協力はする。それじゃあな」

「おう、またな！」

「後日、頼むぞ」

二人に向けて笑みを浮かべると、日番谷は瞬歩で消えた。

「「ん？」「」

何処からか視線を感じ、夜一と空鶴は後ろを振り向く。

視線の先には、死神代行を勤めていた旅禍の一人・黒崎一護が突っ立っていた。

「何突っ立ってるんじゃ、一護。修業は終わったのか？」

「いや、ただ……」

「はあ！？まだ終わってないのかよ！？あんな簡単な……サボってねえでさっさと上達しやがれ！！！」

「はっ、はい！」

空鶴に勢いよく怒鳴られ、一護は慌てて練武場に戻る。

そんな一護の顔は、ほんのりと赤く染まっていた。

「随分と、都合良く警鐘が鳴るものだな」

一つの声が響く。

「……ようわかりませんな。言わはってる意味が」

「……それで通ると思ってるのか？」

——僕をあまり、甘く見ないことだ

三番隊隊長・市丸ギンに、五番隊隊長・藍染惣右介は低い声で告げる。

（市丸が黒幕って思わせて、利用するってところか）

その会話を横で聞いてた日番谷は二人を見つめる。

——愚かなことを

そして、冷たい目で睨みながら、隊首会を終えた一番隊隊舎を後にする。

辺りには、緊急警報とも言える警鐘が鳴り響いていた。

三幕

『緊急警報！緊急警報！瀨靈廷内に侵入者あり！』

——朽木ルキアの処刑が決定してから数日後

旅禍の侵入のため、瀨靈廷中に何百年ぶりの警報が鳴り響いた。

「全ての班は見回りを行ってくれ。なお、旅禍と会ったら直ぐに連絡を。」

くれぐれも無茶するな。勝機が無いと思えば逃げろ。いいな？」

「「「「はい！」「」「」「」」

日番谷の指示に、十番隊の隊員達は勢いよく返事をする。

そして、それぞれの守備場へと付くために急いで走って行った。

一気に大人数が消え静かになったこの場所で、日番谷は自分の伝令神機を開く。

着信に、松本乱菊、という名前が掲示されていた。

「やっぱりかかってきていやがった……」

幼馴染のことでも聞きたかったんだろう……

連絡が付かないと乱菊が煩くなる前に、大分距離がある二番側臣室へとゆっくり歩き出した。

数時間後に二番側臣室への廊下へと付いた日番谷。

感じるのは複数の霊圧と声。

角を曲がると、一番隊副隊長・雀部長次郎の横顔が見えた。

話が聞こえる限り、どうやら旅禍の報告をしているようだ。

「……十一番隊第三席・斑目一角様……同じく第五席・綾瀬川弓親様……」

以上二名の上位席官が重傷のため、戦線を離脱なさいました……！」

雀部は信じられないとでも言うように報告する。

他の副隊長達も、緊張したような強張った表情をしていた。

「で、各部隊の被害状況はどうなってるんだ？」

「はい、各部隊の詳細は……って日番谷隊長!？」

何時の間にか横に立っている存在に、雀部と副隊長たちは驚きで目を見開く。

「隊長！」

「やはり此処にいたか松本」

前にいる副隊長達を押しつけて、慌てて出てくる。

日番谷の前に立つのは自分の副隊長である、十番隊副隊長・松本乱菊だった。

「お前にしちゃ、随分と早い行動だな。そこらかどつかで道草こいてると思ったんだが」

「私だつてやる時はやりますよ。それより、どうしてでないんですか！？」

何度も伝令神機に連絡入れたんですよ！」

「悪い。少し忙しくてそれどころじゃ無かったんだ。だから、こうして来たんだろうが。それで、何の用だ？」

「えっと、その……市丸隊長の処置は、どうなっただんですか？」

不安気に乱菊は聞く。

幼馴染である彼を、心配しているようだった。

「市丸の処置は後で通達されるみたいだ」

「……そうですか」

未だに不安気だが、後で処置ということで少しホッと安心している。

それはギンの副官、三番隊副隊長・吉良イヅルも同じだった。

「それで……どうなってんだ？」

「あつ、はい！各部隊の詳細な被害状況については現在調査中です……ただ」

雀部は顔を顰める。

「十一番隊につきましては……ほぼ壊滅状態であるとの報告が入っ

ています……」

ザワ……と騒がしくなる。

「十一番隊が……！」

「そんな……」

「侵入から数時間でそこまでの被害が出るか……」

驚きで皆は声を上げていく。

そんな中、一人だけ動揺せずに日番谷は視線を向けた。

皆が声を上げる中、六番隊副隊長・阿散井恋次が無言で立っている。

その表情は、何かを知っているようだった。

（確か……阿散井は黒崎一護と抗戦したんだっただな）

朽木ルキアの捕縛の時、それを阻止しようとした一護と抗戦したと聞いていた。

(……感づいたか?)

朽木ルキアの処刑――

それを阻止するため、ルキアに命を救って貰った一護が救出に来たことを……

そう思った次の瞬間、皆にバレない様に窓から飛び降りた。

「な……なんか大変なことになってきちゃったね……阿散井く……阿散井くん……?」

五番隊副隊長・雛森桃が名を呼ぶが恋次の姿は既に無い。

(お手並み拝見とでも行こうか)

恋次の行き先が分かった日番谷は、フーと息を付いた。

ガキーン！

刀がぶつかり合う音がする。

「やはり、こういう事か」

壁の陰から覗いている日番谷の瞳に映るのは、斬魄刀で斬りあう恋次と一護だった。

「さて、どちらが勝つか……お前はと思う——紅蓮」

名を呼んだ瞬間、背中に掛けている斬魄刀……氷輪丸から冷気が漂う。

その冷気は形を変えていき、一人の男へと変貌する。

長い銀髪に真つ赤な瞳……紅蓮と呼ばれた男は口を開いた。

「阿散井とか言う男に一票だ」

興味なさげだが、凜とした声で答える。

「副隊長と死神代行……考えなくとも結果は決まっている」

「そうか？俺は黒崎一護に賭けるぜ」

小さく笑みを浮かべる日番谷に、紅蓮は疑問気な顔をする。

「たかが二ヶ月しか死神の経験が無い元人間、勝機などある筈が無い」

「その二ヶ月で三席の斑目一角に勝った男だぞ。可能性が無い訳でも無いんじゃないか？」

日番谷は二人を見る。

「あいつは成長する可能性がある……今この場で」

そう呟いた瞬間、阿散井の怒鳴り声が響く。

「ふざけるな！」

勢いよく蛇尾丸を一護の斬魄刀へとぶつけて来る。

「てめえがルキアの靈力を奪いやがったから、ルキアの罪は重くなつたんだ！」

わかってんのか！？てめえの所為でルキアは殺されるんだよ！

そのてめえがどのツラ下げてルキアを助けるなんてぬかしやる！？ふざけんじゃねえ！！！」

恋次は怒りを攻撃としてぶつけていく。

「…………俺のせいでルキアが殺される…………？分かってるさ、そんなこと…………！」

一護は顔を上げる。

「だから俺が助けるんじゃないかよ！！！」

ハッキリとそう叫ぶ。

恋次が一瞬動揺したように見えた。

「……………」

一護の言葉が頭を廻る。

そんな一護の意思が伝わってきたような気がした。

だが……

ドン

音を経て、恋次の蛇尾丸は一護の身体を斬りつける。

血がドツと噴出した。

「勝負あつたな」

興味が完全に失せたように紅蓮は呟く。

紅蓮の言う通り、どこから見ても勝負は決まったもんだ。

それでも、日番谷は黙って見ていた。

「……てめーにはルキアは救えねえ。俺に殺されるてめーにはな」

そう告げ、恋次は力を込め蛇尾丸を振り落とした。

空鶴の弟・志波岩鷲と、四番隊第七席・山田花太郎は助けようと飛び出す。

その時だった――

ガッ

「！」

蛇尾丸が手で止められる。

「……………待たせたな恋次……………覚悟だ、てめえを斬るぜ」

ドゥッ

並ならぬ霊圧が漂う……………

その霊圧を放つのは、負けるかと思われた一護だった。

一護はゆっくりと斬魄刀を上げる。

「……………!?……………ちィッ!」

ただならぬ雰囲気圧倒され、恋次は慌てて攻撃を仕掛けようとする。

ズシャ――

血が溢れる……

覚悟の強さで出来た一振りが、恋次の身体を貫いていた。

縛っていた髪は解け、壁へと背中が付く。

「ちくしょおおおおおおお！！！」

恋次の叫びが木霊した。

「氣にくわぬ」

紅蓮が眉を吊り上げながら呟く。

「そう言うな。俺達の手助けが必要なくて良かったじゃねえか？面倒ごとにならない」

一息ついたように言う日番谷をジーと見つめる。

「……どうかしたか？」

疑問気に聞かれながらも紅蓮は見つめるが、やがて意味深げに溜息を付く。

「何でもない……我はこれで失礼する」

紅蓮は冷氣となり消える。

何か氣にくわない事があつて消えたような紅蓮に対して日番谷は、何だあいつ、と呟いた。

はあーと溜息を付きながら再び視線を戻す。

すると何時の間に歩み寄っていたのか、恋次が一護の胸倉を掴んでいた。

「ルキアを助けてくれ……！！！」

強く、ハッキリと叫ぶ。

その叫びには、様々な感情と強い願いが込められているような気がした……

ああ、と返事をする一護の言葉に安心したのか恋次はゆっくりと意識を手放す。

「一護……！！！」

ゆっくりと倒れる一護の元へ、岩鷲と花太郎は駆け寄る。

「おいつ！大丈夫か一護！？」

意識はあるが傷の状態が酷くぐったりしていた。

「酷い状態だな」

突然聞こえた声に、二人は慌てて視線を向ける。

「あつ……あなたは………日番谷隊長!？」

目の前に立っている日番谷の姿に、花太郎は絶叫した。

「なっ!隊長だと!？」

岩鷲は目を見開く。

驚きと動揺で二人は動けずにいたが、ハッと我に帰り一護を守るよ

うに構える。

「いつ……一護さんには指一本触れさせません！」

「かかってくるならこいや！」

キリツと二人は睨み付ける。

だが、そんな二人の身体は僅かに震えていた。

黙って見つめていた日番谷だが、折れるように溜息を付く。

「もう少ししたら他の死神が応援に来る。その前に立ち去れ」

「はぁ!?!」

日番谷の言葉に岩鷲は驚きで声を上げる。

隣にいる花太郎も驚きで目を見開いていた。

「俺が何とかしとくからさっさと行け」

未だに信じられないような事を言う日番谷に二人は激しく動揺する。
理由を聞こうと口を開こうとする花太郎と同時に、意識を失おうと
している一護の瞳が開かれた。

「…………お…まえ…は…………あの…ときの……………」

瞳に映る日番谷の姿に、一護は掠れる声で呟く。

（あの時？）

初めて会う筈の人物にあった事があるように言われて、日番谷は疑問を持つ。

すると、こちらへと向かってくる霊圧を感じる。

一人は副隊長の霊圧だ。

「そいつを連れて早く行け」

「はっ、はい！行きましよう岩鷲さん！」

「おっ、おう！」

日番谷が背中を向けたと同時に、二人は一護の身体を支え立ち上がる。

「……まっ……て……くれ……」

二人は一瞬動きを止める。

「……お……まえ……の……なま……え……は……」

一護の問いに、ゆっくりと顔だけ向けた。

「——日番谷冬獅郎だ」

ハッキリと凜とした声が響く。

……日番谷……冬獅郎……

一護の中でその名は木霊し、意識を失った。

花太郎は頭を下げる。

それに対し日番谷は軽く微笑んだ。

「あ……阿散井さん！」

応援に来た隊員達が、慌てて恋次の元へと駆け寄る。

「日番谷隊長！？これは一体……！？」

日番谷の存在に気づいたイズルが驚いたように声を上げる。

「俺が来た時には既にこうなっていた……たぶん旅禍だろ」

日番谷の言葉に、そんな……！、と信じられないように呟く。

「……何者が逃げたようですね……追いますか？」

一人の隊員が問う。

「いや、今は阿散井の救助を優先するのが賢明だろう……」

空を見上げながら、日番谷は告げたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1617/>

Silvery landscape

2010年10月11日05時43分発行